

花仙人の皆さん。左から佐々木由紀子さん(10区)、山田京子さん(青葉)、松本さん、畠山松代さん(13区)、岡部清子さん(11区)、福井ますみさん(8区)



特集 花の仙人が 住むまち Nanporo

地域住民がつなぐ花の禪たすき
7月。日差しが一層強くなり、夏の到来を告げるこの時期、南幌の路地では色鮮やかな花々が道行く人の目を引きまします。今年も地域を美しく咲く花で染めようと、各団体や町内会の皆さんが、黄色やオレンジ色のマリーゴールドを施設や街路に植えました。
「まちに咲く花は、まちで育った花であってほしい」。こだわりを話すのが、町内で活動する花の会『花仙人』の会長松本豊美さん。例年、町内に植えられる約3万株のマリーゴールド等の苗は、当会から提供されています。「私たちが種を蒔けるのは、花の一生を見守り、お世話をしてくれる人たちがいるから」と松本さん。『花のまち南幌』をテーマに掲げる会の活動は、地域の協力によって成り立っていることを強調します。

花仙人 会長 松本豊美さん(三重)

生まれも育ちも南幌町。平成13年に花仙人加入。入会当時は6名いた会員も、平成18年には相次ぐ引退により山田さんと2名のみに。人手不足による苦難を乗り越え、現在は新たに4名を加えた6名で活動が続ける。「担い手の確保、そして全地域に花仙人が住むまちにすることが目標」と話す。



花でまちに“彩り”を



住民一人ひとりの手で

毎年5月末頃、各行政区や町内会、団体の皆さんが街路沿い花壇の花植えを行っています。今年は、6区町内会と南幌高生が合同でマリーゴールドを植えるなど、奉仕の輪が広がっています。



改善センター前の花壇では、例年さわやかカレッジの皆さんが花植えを行っています。今年の花文字「えがお」も通学途中の小学生や施設利用者の目を楽しませてくれます。

花文字で皆を笑顔に



愛されるまちに

会の発足のきっかけは、平成元年に開催された「はまなす国体」。競技会場となる南幌国際クレイ射撃場を季節の花々で彩ろうと、町内の花好きな主婦たちが立ち上がりました。華やかに飾られた会場は、来場者からの反響も大きかったといえます。その後も、まちを彩り豊かな花で活気づけようと、中央公園や河川敷などでの花植えを続け、平成10年、当初から中心となつて活動してきた4名による『花仙人』が誕生しました。

「いつでも明るく咲く花で迎え入れることで、外から来る人、それから地元の人にも、まちをもっと愛してもらいたかった」。そう話すのは、初代会長の中川タツ子さん（青葉）。毎年、鮮やかなピンクのペチュニアで街路を覆った会の伝統は、今も黄金の花を咲かせる後継者たちによって受け継がれています。

花市

～平成30年5月27日～

恒例の花仙人掌主催イベントも、ついに20回目の開催を迎えました。サルビアやダリアなど計4,800株の花の苗が用意され、来場者の長い列ができました。



昨年南幌町に転入し、初めて花市を訪れたという、伊藤均さん、尚美さん夫妻はペコニアを購入し、「庭や玄関先に植えて楽しみたい」と話しました。



▲中央公園の花壇にそよぐ色とりどりの花たち(平成11年6月撮影)

◀一本一本丁寧に花を植える住民の方々(平成12年5月撮影)

花のまち南幌

初代花仙人



華やかに飾られた、はまなす国体の会場

のはじまり

花仙人を突き動かすもの

1990年代、町内では団地の開発が進み、それに合わせて庭やベランダで花や緑を楽しむガーデニングのブームが到来しました。自らを、花好きの集まりと呼ぶ初代花仙人の皆さんも、この時期に花市や、まち全体を彩る活動を開始しました。「自分たちの楽しみが、まちの人の喜びに繋がるのだから、幸せなことですよ」と中川さん。

花市で売られる苗のポットが通常よりも大きく、土がたっぷり入っているのは、より丈夫な苗を手にとってもらうため。返ってくる笑顔のためなら、コストや労力を費やすことに惜しみはありません。「花仙人の活動の陰には、いつも家族の支えがあった」と話すのは尾暮信子さん(12区)。数千株の花の育苗と運搬作業を毎年行えたのは、家族の協力があったからだといえます。現在も花仙人として活躍する山田京子さんは、小学校児童からもらった花植え指導のお礼



花市

～平成11年5月30日～

花づくりの輪をまち全体に広めたいと、中央公園で開催された1回目の「花市」。約1,000株の苗を市価の3、4割引きで販売し、数時間で売り切れてしまう大盛況ぶり。翌年には数を倍に増やしたそうです。



初代花仙人の皆さん。第2回花市(ビューロー会場)にて。



今年の6月、数年ぶりに顔を合わせた4人。思い出話に“花”を咲かせていました。

の手紙を、今でも大切に保管しています。

誰かの「支え」や「笑顔」がそばにあることが、長く活動を続けられる理由なのかもしれません。花のまちをこれからも

初代のメンバーが揃ったこの日、新たな仙人が熱意を受け継ぎ活動していることについて、どのように思うのかを尋ねてみました。開口一番「とにかく嬉しい」と北野きく子さん（14区）「遠回りしてでも見に行くくらい、私たちもまちに咲く花を楽しみにしている。これからも新しい仲間を迎え入れながら、無理をしないで活動してほしい」と続けました。それを聞いた松本さんは「先輩方が見ているのなら、これからは油断はできません」と笑顔。「築いてくださった土台、そして想いを絶やすことなく引き継いでいきたい。そしてどんなに時が経つてもこのまちは『花のまち』であり続けてほしい。」と話しました。

マリーゴールドの花言葉は「予言」。花々は、まちが更なる明るい未来へと突き進むことを、見通しているに違いありません。



北野きく子さん

中川タツ子さん

尾暮信子さん

山田京子さん

